

氏名	山田兵衛
	やま だ ひょう え
学位の種類	医学博士
学位記番号	論医博第495号
学位授与の日付	昭和47年5月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	<b>Hypergonadotropism に基因する実験的卵巣腫瘍成生過程における Gonadotropin 作用の意義ならびに卵巣におよぼす HCG および PMS の生物学的作用について</b>
	(主査)
論文調査委員	教授 西村敏雄 教授 岡本耕造 教授 翠川 修

### 論文内容の要旨

実験的卵巣腫瘍作製法の一つとして、Biskind & Biskind (1944) は去勢ラットにおいて脾臓内卵巣移植を行なうことにより移植卵巣が腫瘍化することを報告した。

本法による卵巣腫瘍発生機序は、生体ホルモン環境の imbalance の結果紹来する Hypergonadotropism が脾臓内移植卵巣に影響を及ぼしたものとされている。

著者は wistar 系成熟雌性白鼠を用い、去勢後脾臓内卵巣移植動物を作製し、これを Gonadotropin を負荷しない、いわゆる in situ のものと、特に PMS および HCG を単独あるいは混合して長期間連続的 (1~12カ月間) に負荷した二群に分け、移植卵巣の腫瘍化過程を経時的に組織学的あるいは組織化学的に追求、これに及ぼす影響を検討した。即ち Gonadotropin を負荷しない in situ のものでは顆粒膜黄体細胞と内莖膜細胞がほぼ均等に存在するいわば混合型の腫瘍を形成するが、この際には顆粒膜黄体細胞の変性傾向が著るしかった。しかるに PMS および HCG 混合投与による卵巣腫瘍の場合ではその構成細胞は in situ のものと同様に両細胞の混合型腫瘍とはなっているものの細胞の変性傾向は少なく、機能的にはより vital であろうことを予想せしめる腫瘍を形成した。一方 PMS 投与の移植卵巣では顆粒膜黄体細胞を主体とした腫瘍が形成されるが、HCG 投与の際では移植後比較的早期の頃から内莖膜性細胞の特異的な増殖が著るしく、終局的には内莖膜性細胞のみの細胞塊よりなる、莖膜細胞腫に酷似した腫瘍を形成した。

これらのことから少なくとも PMS は顆粒膜黄体細胞に対し、HCG は内莖膜細胞に対しより積極的な生物学的作用を発揮していることが推察された。

### 論文審査の結果の要旨

実験的卵巣腫瘍作製法の一つとして Biskind & Biskind の方法 (去勢ラットにおける脾臓内移植卵巣の腫瘍化, 1944) があるが、著者はこの形成過程に PMS 及び HCG を単独或いは混合して長期間連続

的に負荷した場合、組織学的に如何なる特長を有する腫瘍が発生するかについて詳細に検討している。この結果要するに PMS すなわち FSH 作用の強いゴナドトロピンの場合では顆粒膜黄体細胞を主体とした腫瘍、LH 作用の強い HCG の場合では内茨膜細胞を主体とした腫瘍が発生することをみ、この際両者の混合投与の場合では両組織細胞をほぼ均等に混合した混合型腫瘍の発生をみ、in situ の場合では両細胞が均等に混合した腫瘍であるが顆粒膜黄体細胞に変性傾向が強いことと比較して、PMS が顆粒膜黄体細胞に対し、しかるに HCG では内茨膜細胞に対してそれぞれ生物学的効果を積極的に発揮していると結論した。

以上からゴナドトロピン FSH は顆粒膜黄体細胞に対し、ゴナドトロピン LH は内茨膜細胞に対し強い生物作用を有すると推論した。

よって、本論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認める。